



(吉野山)

6 遺跡の年代 七世紀後半～八世紀初頭
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

調査地は、藤原宮南面西門の南方約100mにあり、敷地内に七条
条間小路及び西一坊大路推定線が通る。調査面積は六五五m²である。
検出した主な遺構は、七
条条間小路と西一坊大路交
差点の西南部分、つまり七
条条間小路南側溝と西一坊
大路西側溝である。

西一坊大路西側溝は、七

条条間小路を横断せずに西
に曲がり、小路南側溝に接
続する。ただ、七条条間小

奈良・藤原京跡右京七条一坊

- | | |
|-----------------|----------------|
| 所在地 | 奈良県橿原市飛驒町 |
| 調査期間 | 一九九〇年（平2）九月～一月 |
| 発掘機関 | 橿原市教育委員会 |
| 調査担当者 | 阪口俊幸 |
| 遺跡の種類 | 都城跡 |
| 6 遺跡の年代 | 七世紀後半～八世紀初頭 |
| 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要 | |

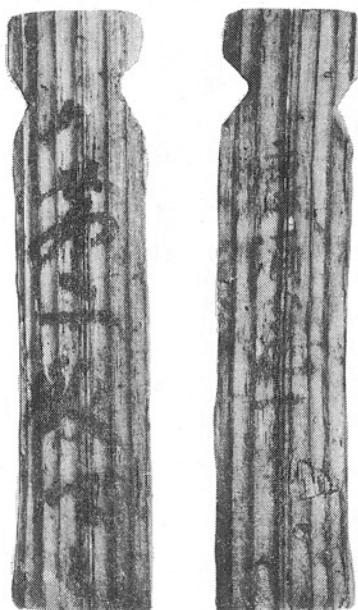
路南側溝は、西一坊大路西側溝との接続部分から約8mの地点でそ
の深さを急激に減じているから、水流は全体的に停滞傾向にあると
いえる。木簡は、この南側溝終端付近の最下層（暗灰色粘土）中から
単独で出土した。削屑や木製品は全く見られなかった。

さて西一坊大路西側溝の西側では、これに平行する南北一本柱列
を検出したが、興味深いことに溝と柱穴の切合い関係から、両側溝
よりも南北柱列が先行して設置された可能性が高い。七条条間小路
路面部分の柱のみ抜き取られていることもこれを示していると考え
られる。

8 木簡の釈文・内容

- (1) •「▽鹿須志一□」
•「▽□第二殿下々」

119×28×9 032



「須志」は「スシ」と読み、いわゆる「鮓」であると考えられる。

藤原宮跡出土木簡には「尾張国海部郡魚鮓三斗六升」と記すものが
ある(奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報』八一

九八七年)ものの、「須志」の用字は、藤原宮及び平城宮出土木簡を
通じて初出である。鹿のスシ(鮓・須志など)は、木簡としては初出
であるが、『延喜式』主計上の中男作物条、及び同紀伊国・筑前国・
豊前国・豊後国の各中男作物の品目としてそれぞれ「鹿鮓」がみえ
る。

なお、釈説については、奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘
調査部橋本義則氏、奈良県立橿原考古学研究所勝部明生・菅谷文則
・中井一夫氏、京都教育大学和田萃氏のご教示を得た。

(阪口俊幸)

木簡研究第一二号

卷頭言

田中琢

一九八九年出土の木簡

概要 平城京跡 平城京左京二条四坊十一坪 薬師寺 西大
寺 藤原宮跡 藤原京跡 山田寺跡 上之宮遺跡 飛鳥京跡
長岡京跡(1) 長岡京跡(2) 長岡京跡(3) 平安京左京三条三坊
十六町 平安京西市外町 平安京右京六条一坊十三町 平安
京右京七条二坊十四町 久田美遺跡 大坂城跡(1) 大坂城跡
(2) 大坂城跡(3) 上清滝遺跡 日置莊遺跡 上町遺跡 小曾
根遺跡 森北町遺跡 但馬国分寺跡 砂入遺跡 鳴遺跡 山
国・源ヶ坂遺跡 上滝野・宮ノ前遺跡 清洲城下町遺跡 川
合遺跡八反田地区 多摩ニユータウン遺跡群(No.107遺跡)
西河原森ノ内遺跡 木部遺跡 虫生遺跡 筑摩佃遺跡 国分
境遺跡 門田条里制跡 胆沢城跡 秋田城跡 辻遺跡 寺前
遺跡 天神山遺跡 百間川原尾島遺跡 草戸千軒町遺跡 周
防國府跡

一九七七年以前出土の木簡 (一一)

平城宮跡(第三五次)
木簡類による和名抄地名の考察
—日本語学のたちばから—

内資人考

春名宏昭
山尾幸久
工藤力男

頒価 三八〇〇円 一四〇〇円

彙報